

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520335

研究課題名(和文) アジア系アメリカ文学における「幽霊物語」 民族、性、ポスト植民地主義の視座から

研究課題名(英文) "Ghost Stories" in Asian American Literature: from the Perspectives of Ethnicity, Gender and Post-colonialism

研究代表者

小林 富久子 (Kobayashi, Fukuko)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：00063751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円、(間接経費) 1,110,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はアジア系アメリカ文学における「幽霊物語」の今日的意義を歴史的背景とともに探ることを狙いとしている。結果として得られた知見は次の通りである。1) 一般に西洋文学では妖怪、化物としてのみ表されがちな「幽霊」は、アジア(系)文学ではより人間的なものとして扱われることが多いが、それはこの世とあの世を明確に分かたないアジア一般の死生観に由来している。2) 今日のアジア系文学における「幽霊物語」の多くは、20世紀に日米等の強国によって侵略・支配された自民族のトラウマ的過去を明るみにするものである。3) それによって公式の歴史では埋もれていた過去を甦らせ、よって歴史認識の変容を迫ろうとするものである。

研究成果の概要(英文)：This project aims at exploring the significance of the "ghost stories" in today's Asian American literary texts vis-a-vis their historical backgrounds. As a result, we have come to obtain the following insights. 1) Contrary to the general tendency of the Western "ghost narratives" that deal with "ghosts" as mere monsters, Asian(American) literary texts tend to portray them more as humane beings--the fact that obviously reflect the general Asian world-view that does not draw a clear-cut line between the living and the dead, this world and the world after death. 2) Many of the "ghost narratives" in today's Asian American literary texts are the reflections of such traumatic memories as wars and violent disputes, which occurred in a large part of Asia throughout the 20th century. 3) They are significant in that they have the power to change historical consciousnesses of the readers.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：アジア系アメリカ文学 幽霊物語 西洋文学 死生観 ト라우マ 記憶 民族的過去 歴史認識

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究代表者の小林、及び、分担者の平石、河原崎はいずれも、「アジア系アメリカ文学研究会」(AALA)の会員であり、すでに、アジア系とオリエンタリズム、多文化主義と混血、アジア系「基地文学」の系譜、などの科研費による諸研究に従事し、その成果を報告書作成やシンポジウム開催といった形で公にしてきた。

(2) とりわけの「基地文学」研究を進める過程で、アジア系アメリカ文学作品には、作者各々の出身地ないしは祖先の地としてのアジア各地に発生した血なまぐさい戦争や暴力的紛争などのトラウマ的出来事を映し出す様々なタイプの幽霊物語(ghost narrative)が頻繁に出てくることに着目し、それが、アジア各国で伝統的に伝えられてきた「幽霊物語」とどのような繋がりをもつか、さらには、主流のヨーロッパ系文学で扱われている「幽霊物語」といかなる違いをもつか、などについて探求することに関心を寄せるようになり、よって本研究をスタートさせた次第である。

(3) 研究分担者のうち、岡島のみがアフリカ系アメリカ文学を専攻領域としているが、長年小林の大学院ゼミでアジア系文学をも学んだことと、ニューヨーク大バッファロー校の博士課程で最新の文学理論、とりわけポスト植民地主義理論を習得してきたことなどから、本プロジェクトにふさわしい人材として加わるようになったという次第である。

## 2. 研究の目的

(1) 近年、米国の批評界では、「幽霊物語」を有意義な文学ジャンルとして見直す動きが盛んだが、未だヨーロッパ系文学が中心で、アジア系アメリカ文学に焦点を当てた批評書は、ほとんど見当たらない。それ故、本研究では、アジア系アメリカ文学の中でも特に、「幽霊」、「憑依」、「シャーマニズム」等を扱う作品群を、背後の文化や歴史と関わらせつつ、集中的に考察する。

(2) 本研究を通して明確化することを意図した論点は主に次の3つである。

西洋的の死生観や世界観にいかなるオルタナティブな見方を提供しているか？  
戦争、移住、差別等、アジア系の人々が潜り抜けてきた様々なポスト植民地的状況からのトラウマ的記憶をいかに表わしているか？  
概してアジアに支配的な家父長的規範にいかなる抵抗を示しているか？

## 3. 研究の方法

(1) まず本研究は、文学はもとより、民俗学、文化人類学、宗教学、精神分析学等、

多分野に跨るものなので、極めて多岐にわたる文献調査が必要であった。また、アジア系「幽霊物語」を生み出した文化的風土に直接触れ、かつ、各国での新資料を収集したり、作家・研究者からの聞き取り調査を行ったりするためにも、米国をはじめ、アジア各国にも赴き、そこでの現地調査を行うことも不可欠であった。

(2) 以上のことから本研究は、以下の3段階に分けて行った。

### 第1段階

「幽霊物語」を扱うアジア系アメリカ文学テキスト並びにその批評書を、ヨーロッパ系文学テキスト並びにその批評書とともに、できる限り精査した。

### 第2段階

共同研究者の各々が主に米国に赴き、「幽霊物語」を扱ったり、研究したりしている作家・研究者からの聞き取り調査を行うと同時に、米国の図書館や関連施設を訪れ、アジア系「幽霊物語」に関わる一次資料の収集も行った。

### 第3段階

必要に応じて、アジア各国にも赴き、アジア系「幽霊物語」の母体となっている歴史的・文化的背景を探るべく、現地での聞き取りや文献調査を行った。

## 4. 研究成果

(1) まず、アジア系アメリカ文学における「幽霊物語」の扱い方に共通する性格を探るにも、西洋文学において「幽霊物語」がどのように扱われてきたかを知る必要がある。西洋ではしばしば「ゴシック文学」として括られるこのジャンルが独自の伝統を築いてきたことは、その古典的研究書として名高い H. P. Lovecraft の *Supernatural Horror in Literature* から明らかである。そこに読み取れるのは、死者の蘇りを単純に生者を脅かす妖怪・化け物の現われと見がちな西洋の合理性至上主義である。それとは逆にアジア系「幽霊物語」の背後には、死者を生者から明確に分かとうとしない、アジア文化に特徴的な中間的思考法とも呼びうるものが存在する。この考えを理論的に説明しているのが、ベトナム系批評家・映像作家のトリン・T・ミンハである。元々本企画を立てる上で大きなインスピレーション源をなしたのがこのトリンの考えで、それは近著『こここのなかの何処かへ』と並んで、本プロジェクトの期間内に行った彼女へのインタヴューからもさらに深めえたという次第である。

そこで肝心のアジア系「幽霊物語」に関してだが、本研究では研究者各々の専門領域を考慮し、基本的には各エスニック集団毎に分けて考察することとしたが、それとは別に各々の「幽霊物語」の内容によって以下の分類法も可能であることを断っておく。

祖先崇拜的儀式や習慣を扱う「幽霊物語」

家父長的儒教文化への異議申し立てとしての「幽霊物語」

シャーマニズムの伝統に基づく「幽霊物語」

戦争文学としての「幽霊物語」

植民地支配における暴力と死を告発するポスト植民地主義的「幽霊物語」

以下では、当初からの予定通り、各エスニック集団毎に、「幽霊物語」の扱い方、その背後の歴史的・文化的背景、及び、そこから何が明らかになるかについて、コリア系、日系、フィリピン系、アフリカ系との比較、の順に考察して得られた成果を列挙する。

## (2) コリア系「幽霊物語」(小林担当)

コリア系アメリカ文学には「幽霊物語」が数多く扱われており、その宝庫と言っても過言ではない。その裏にはまず、朝鮮半島の民衆の間では伝統的にシャーマニズムが盛んで、それがコリア系文学作品にも貴重な枠組みを提供してきたという事実がある。また、そうしたシャーマニズム的語りが今日のコリア系の若い世代の作品にも頻繁に見られるという事実は、20世紀以降、朝鮮半島及びそこ居住する人々が強国としての日本、そしてアメリカによる侵略や支配の犠牲となり、血なまぐさい戦争や暴力的紛争に巻き込まれた結果、多数の死者や破壊を目の当たりにしてきたことと関係付けられよう。具体的には、

日本の韓国併合に伴う過酷な植民地政策、米国と中国の代理戦争としての朝鮮戦争によって多数の死者が民間にも出たということ、米国の同盟国として多くの韓国兵がベトナムに送られ、犠牲者となったこと、などが挙げられる。結果として、朝鮮半島を出身地もしくは祖先の地とする人々の意識には、公の歴史では絶えて語られずに葬り去られていた同胞の死者や犠牲者たちの思いが積み込まれており、それが現在のコリア系文学におけるシャーマニズム的語りとして結実するに至ったことが指摘される。

そうしたコリア系「幽霊物語」の代表作としてまず挙げられるのが、日本帝国主義の犠牲となり、然る後にアメリカの植民地主義のもとで建てられた多くの米軍基地からもたらされた過酷な運命を、民衆の間で代々語り伝えられてきた数々の民話としての「幽霊物語」を織り込みつつ、主として母と子供たちの悲劇的物語として綴る Heinz Insu Fenkl の *Memories of My Ghost Brother* である。そこには、日本人にも馴染みの女狐としての妖女など、超自然的な生き物の物語が多数見られる。Heinz Fenkl は、民俗学者としても知られており、そんな彼の *Memories of My Ghost Brother* は、日・米の帝国主義・植民地主義的支配に翻弄されてきた朝鮮半島の人々の魂を鎮める試みであると同時に、民族的遺産としての豊かな民話の伝承を今に伝えんとする企てとも言えよう。

現代のコリア系「幽霊物語」の代表作とし

て次に挙げたいのが、いずれも太平洋戦争時に日本兵の従軍「慰安婦」として残酷な扱いを受け、沈黙のうちに死んでいったコリア系女性たちを今に蘇らせる作品としてのチャンネ・リーの『最後の場所で』と Nora Okja Keller の *Comfort Woman* である。前者は、邦訳もあるので、日本にも知る者が多いはずだが、どちらかと言えば「慰安婦」としての女性の登場人物をエロチックな覗き見の対象として捉える点で男性中心的視線を感じさせる。これに対して Keller の作品は、文字通り巫女(shamaness)としての元「慰安婦」を語り手としており、作者自身のフェミニズム的視点が十分活かされた作品と言える。娘が母の死後に発見した母の遺言から、生前謎の多かった母の過去を探求してゆく過程で自分自身をも取り戻すというこの作品は、明確にマキシーン・キングストーンやエイミ・タン、さらにはヒサエ・ヤマモト等によって人気を博すようになったアジア系母娘物語を思わせるが、とりわけ Keller の作品で注目すべき点は、朝鮮半島に伝統的なシャーマニズムの語りをそのまま母親の語りとして採用していることである。Heinz Fenkl は、元来、朝鮮半島のシャーマニズムは、儒教的な家父長制によって圧迫され黙らされてきた女性たちからの異議申し立てを示すと共に、彼女たちの女性としての誇りをも主張するものとみなしている。*Comfort Woman* は、まさにそうした朝鮮半島の庶民の女性たちの間で伝えられてきた「幽霊物語」を見事に現代の作品として語り直したものとと言える。

## {3} 日系「幽霊物語」(平石担当)

ハワイにおける日系文学の系譜を辿ると幽霊や亡霊が様々な形で多用されていることが明らかにされるが、その代表例がハワイ島出身の詩人、ギャレット・ホンゴの自伝『ヴォルケイノ　ハワイの回想』(以下、『ヴォルケイノ』)である。このテキストは、日系三世であるホンゴがハワイ島で家族と9カ月間滞在した経験をもとに書いた回想記で、1995年に出版されている。元々ハワイ島での貧しい生活から脱すべく本土に移住したホンゴ及びその両親たちだったが、結局、一家はハワイに戻ることは絶えてなかった。だが、20数年ぶりにハワイへ戻ったホンゴ自身は、長い間、謎のままであったホンゴ一家の過去を知ること、自分の「起源の物語」を発見していく。ハワイでの家族の歴史について無知であったため、常に喪失感や閉塞感に襲われていたホンゴにとって、特に不可解な存在が父のアルバートで、彼は最後まで頑なに沈黙を守ったまま不遇の生涯を終えている。聴覚障害を抱えていた父は本土の英語になじむこともできず、様々な移民が働く修理工場でも物笑いの種でしかなかった。新しい土地になじむこともできず、移住先でもハワイの「ローカル・ボーイ」でしかなかった

父に沈黙を強いたものを探る過程でホンゴが意識するに至ったのは、ハワイ島の豊かな自然に遍在する幽霊の存在であった。特に、“Ghost”と題された章では、一家の「仰天するほどねじまがった家系」を親戚から聞きながら、破天荒な人生を歩んだ祖父のトラウマや、幼かった父を捨てて、他の日系男性と駆け落ちをした祖母ユキコなどが亡霊と化してホンゴの現在に深く関わっていることを次第に認識していく。そして亡霊たちの沈黙を想像力で言語化する試みを故郷で始めるのである。何度も結婚を重ねた祖父に象徴される一家の離散の歴史を知らされたホンゴはそのような試みを通して次第に祖父や父の過去との接続を回路を見出すようになる。このようにホンゴにとって幽霊は、単に不可解かつ恐怖を喚起する存在ではなく、失われた過去を取戻し、自身の現在との連結を発見する契機となる存在であることが示唆される。

現代のエスニック作家による幽霊物語を「文化的憑依の物語」として論じたカスリーン・ブローガンは、「幽霊」は「文化的記憶と文化的再生」を可能にする存在であり、新たな自己発見を促すものとして説明している。先述のように、『ヴォルケイノ』でも幽霊は、ホンゴが過去と対峙する契機として重要な役割を担っている。また、ブローガンは、幽霊は民族共同体としての集合的な記憶の再生や歴史の語り直しを可能にする存在として現代のエスニック文学では表象されていると指摘しているが、『ヴォルケイノ』でもホンゴ一家の家族史は日系移民の歴史とも重なっていることが示されている。詩人は、「歴史的な出来事の証人でなければならない」とするホンゴは、『ヴォルケイノ』において、幽霊を創作の中心のモチーフとして用いることで、アジア系ディアスポラ詩人としての「精神の脱植民地化」を目指したと言える。

最後に注目しておきたいのは、ホンゴにおける幽霊表象が常に父的なものと結びつけられている点である。例えば、同じハワイ出身の詩人であるジュリエット・コウノなどとの比較を行えば、日系文学における「幽霊物語」に関する新たな示唆があたえられるようにも思われる。

### {3} フィリピン系「幽霊物語」(河原崎担当)

フィリピン系アメリカ文学には、「幽霊物語」がきわめて多く用いられていることが明らかとなった。作家たちは、故国フィリピンを表象する際に、伝承された文化として「幽霊物語」を用いるという形をとることが多い。フィリピンは長年植民支配やそれにまつわる暴力行為との関連で登場することが多い。そもそもフィリピン文学の始祖である Jose Rizal が古典となっている *Noli Me Tangere* において、ヨーロッパから帰国した主人公がマニラで見る亡霊に非西洋の価値を見いだ

すところから伝統ができていえる。それは、現代の Jessica Hagedorn や Cecilia Brainard にも継承され、前者は暴力と、後者は戦争と死との絡みで幽霊を効果的に登場させている。特に今回、若い世代の作家の Miguel Syjuco や Tess Uriza Holthe が日本の植民統治のテーマに幽霊伝承を絡めたことに注目した。これらの作家たちは、日本植民統治がいかに過酷であったかを、幽霊あるいは架空の生き物など対比しつつ描きだし、きわめて強烈なインパクトを生み出している。Holthe は幽霊伝説を戦争の複雑さと表裏一体の関係にあると描きだし、伝承物語が民衆レベルでの抵抗を示すものに他ならないことを示しているが、これは Brainard にも共通する思考である。結局、フィリピン系作家たちは、幽霊伝承物語をフィリピンの植民支配における暴力的な剥脱を否定し、癒し、誇りを取り戻すためのものと位置付けているように思われる。

### (4) アフリカ系との比較(岡島担当)

アフリカ系の文学作品では生者と死者の明確な分離は見られず、東洋に似た死生観が見られることが判明した。アジア系の文学作品との共通項として特に興味深いのは、帝国主義や植民地主義の記憶や大文字の歴史からは忘却された小さな物語が「幽霊」のような存在を通して表象されている点である。

ナイジェリアの作家ベン・オクリ著の *The Famished Road*(1991)では、現地の民間伝承に基づいた「アビク」という生と死を繰り返す精霊である主人公の少年アザロの語りの中に、植民地時代の、特に奴隷貿易の記憶が描き込まれている。「アビク」であるアザロは、生まれるとすぐに“World of the Unborn”に戻る事が運命づけられているのだが、両親とともに“World of the Living”に留まる事を決意する。すると「死者の国」から“Spirit”たちが彼を連れ去りにくる。“Spirit”とは元々奴隷商人たちが“kidnap”の代わりに使用していた独特の用語であることは、偶然ではないだろう。さらに、この二つの世界は三途の川のような大きな川によって隔てられており、この川は奴隷貿易時代の大西洋を思わせる。つまり、「生者の国」と「死者の国」は、それぞれアフリカと新世界アメリカ大陸を表しており、アザロの二つの世界の繰り返しの移動は、アフリカ人たちの悲劇的な移動の歴史、つまり奴隷貿易のメタファーとなるのだ。

以上の点において、アフリカ系の文学作品にも、アジア系アメリカ文学の諸作品にみられた西洋の合理主義に対するオルタナティブな視点と植民地支配における暴力的な歴史を告発するポスト植民地主義的な「幽霊物語」を見出だすことができた。

### (5) 研究の総括と国内外でのインパクト 以上のアジア系「幽霊物語」に関する調査・

研究の結果、全体として次のようなことが明らかになった。

アジア系アメリカ文学における「幽霊物語」は概してアジアに伝統的な生者と死者、この世とあの世を明確に分離しない世界観、人間観の産物と言える。このことは、西洋ではしばしば「ゴシック」文学と呼ばれる「幽霊物語」に登場する怪物ないしは化け物としての亡霊や幽霊たちと比べると、アジアの「幽霊物語」の幽霊や亡霊は、より人間的な存在としてプラスのイメージを与えられることが多いことから窺える。

現在のアジア系「幽霊物語」の多くが20世紀を通してアジア各国が日本や米国等による帝国主義的・植民地主義的介入・支配の結果として戦場や紛争の地となったことから犠牲となった多数の名もなき死者たちの魂を蘇らせ語らせることで、そうした人々への鎮魂を図るものであること。

最後に、そのように犠牲者たちの声を沈黙と忘却から救出し語らせることによって、公式の歴史では無視され忘れ去られてきたアジア(系)の人々への不当な抑圧や搾取を明るみにし、それを告発するという目的をもつものである。

以上のことから、このジャンルの優れた理論的批評家、アヴァリー・ゴードンの指摘にもあるように、アジア系の「幽霊物語」は人々の歴史意識に変革をもたらすという重要な任務を帯びるものであることを強調しておきたい。太平洋戦争や朝鮮戦争、さらには、その後のアジアを舞台にする様々な戦争に対する加害者の責任を探る機運が高まっている今日、アジア系「幽霊物語」は今後もますます注目され続けるはずで、その点においてアジア系アメリカ文学における「幽霊物語」に焦点を絞った希少な研究としての本研究も、日本の内外でインパクトを発揮することが期待される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- 小林富久子、竹村さんと文学力、アメリカ文学(アメリカ文学界東京支部会報) 74、査読有、34-41、2013年。
- Kei Okajima (岡島慶)、Bodily "Touch" and Racial Formation in Milton Murayama's *All I Asking Is My Body, Explicator* (Routledge), 査読有、173-176、2013年。
- 河原崎やす子、グアムにおける植民地主義の告発 喪失と回復をめぐるチャモロの声、*AALA Journal*, 査読有、No.18, 55-63、2012年。

〔学会発表〕(計 2 件)

- Kei Okajima (岡島慶)、Diaspora in Invisibility: Ralph Ellison and the National Fantasy of the Cold War

America、The 28<sup>th</sup> Annual MELUS Conference & The Ralph Ellison Centennial Symposium, Oklahoma City, 2014年3月7日。

- 小林富久子、竹村和子さんと「文学力」、日本アメリカ文学会東京支部6月例会、慶応大学、2012年6月30日。

〔図書〕(計 6 件)

- 小林富久子、稲木(平石)妙子、河原崎やす子、岡島慶、憑依する過去 アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生、i xv, 2-16, 44-61, 95-115, 151-165、金星堂、2014年。
- 河原崎やす子、ことばのプリズム、彩流社、11-32、2014年。
- 小林富久子、稲木(平石)妙子、河原崎やす子、アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために、世界思想社、85-103, 104-120, 203-220、2011年。
- 小林富久子、稲木(平石)妙子、河原崎やす子、アジア系基地文学の系譜 戦争・記憶・語り(平成20-22年度科学研究費成果報告書) 1-18, 19-25, 37-48, 49-57、2011年。
- 稲木(平石)妙子、オルタナティブ・ヴォイスを聴く、音羽書房、101-103、2014年。

〔その他〕 翻訳(計 2 件)

- 小林富久子訳、トリン・T・ミンハ『このなかの何処かへ 移住・難民・境界的出来事』平凡社、265頁、2014年。
- 小林富久子訳、モニク・トゥルン『ブック・オブ・ソルト』、彩流社、373頁、2013年。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小林富久子 (KOBAYASHI, Fukuko)  
早稲田大学教育・総合科学学術院・教授  
研究者番号: 00063751

### (2) 研究分担者

平石妙子 (HIRAISHI, Taeko)  
共立女子大学国際学部・教授  
研究者番号: 80060705

河原崎やす子 (KAWARASAKI, Yasuko)  
岐阜聖徳学園大学外国語学部・教授  
研究者番号: 80341808

岡島慶 (OKAJIMA, Kei)  
早稲田大学教育・総合科学学術院・助手  
研究者番号: 10710569